



2011年6月8日放送

## 漢方頻用処方解説 麦門冬湯①

富山大学大学院医学薬学研究部和漢診療学講座

野上 達也

### 主な効能

麦門冬湯は主に強い乾性咳嗽に対して用いられます。気道の乾燥感を伴い咽頭不快感があること、痰はほとんどなく咳の最後に少量喀出する程度であることが目標とされます。

エキス剤の効能や近年発表されている知見から適応病態をまとめますと、1. 痰の切れない咳、2. 気管支炎、3. 気管支喘息、4. 咽頭炎、5. しわがれ声、6. 術後遷延性咳嗽、7. 口腔乾燥症、8. 味覚障害、などに対して用いる機会があると考えられます。

### 処方の出典、処方名の由来

麦門冬湯の出典は『金匱要略』です。肺痿肺癰咳嗽上気病篇に、「大逆上気、咽喉不利、逆を止め、気を下ろすは麦門冬湯之を主る。」と記載されています。「大いに気が逆上して、喉がつまったように苦しいものには、逆上を止め、気を下ろすために麦門冬湯がよい。」という意味になります。

麦門冬湯は麦門冬、半夏、粳米、大棗、人参、甘草の6つの生薬で構成される処方です。処方名は君薬である麦門冬に由来します。

### 構成生薬の漢方的解説

原典では麦門冬七升、半夏一升、粳米三合、大棗十二枚、人参二両、甘草二両を煎じて

内服することとなっており、現在、われわれは麦門冬 10g、半夏 5g、粳米 5g、大棗 3g、人参 2g、甘草 2g として用いています。

麦門冬はユリ科ジャノヒゲの根の膨大部です。『神農本草経』では上品に収載されており、「味甘平。心腹の結気、傷中、傷飽で胃の絡脈が絶し、羸瘦、短気するものを主る。久しく服すれば身を軽くし、老いず、飢えず。」と述べられています。咳を鎮め、咽喉の通りをよくし、肺を潤し、熱を去る作用があるとされています。

半夏はサトイモ科カラスビシャクの塊茎です。『神農本草経』では下品に収載されており、「味甘平。傷寒の寒熱、心下堅、気を下し、喉咽の腫痛、頭眩、胸張、欬逆、腸鳴、汗を止めるを主る。」と述べられています。吉益東洞の『薬徴』には、「主治は痰飲、嘔吐なり。旁に心痛、逆満、咽中痛、咳、悸、腹中雷鳴を治す。」と記載されています。気を下ろし、消化機能を調整する作用、鎮吐作用、鎮咳作用があります。

粳米はイネ科イネの種子です。『名医別録』には、「味甘、苦平。無毒。気を益し、煩を止め、洩れを止めるを主る。」と述べられています。香川修庵の『一本堂薬選』には「渴を止む。恒に食して元気を保続す。」と記載されており、滋養、強壯、緩和、止渴作用があります。

大棗はクロウメモドキ科ナツメの果実です。『神農本草経』では上品に収載されており、「味甘平。心腹の邪気を主る。中を安じ、脾を養い、十二経を助け、胃気平にし、九竅を通じ、少気、少津、身中の不足、大驚、四肢重きものを補し、百薬を和す。久しく服すれば身を軽くし、年を長ず。」と述べられています。他薬の効果を調和、緩和させる作用があり、脾胃を補う薬能を持つとされます。

人参はウコギ科オタネニンジン根の根です。『神農本草経』では上品に収載されており、「味甘微寒。五臓を補し、精神を安じ、魂魄を定め、驚悸を止め、邪気を除き、目を明らかにし、心を開き、智を益すを主る。久しく服すれば身を軽くし年を延べる。」とされています。『重校薬徴』には、「心下痞鞭支結を主治し、心胸停飲、嘔吐、不食、唾沫、心痛、腹痛、煩悸を兼治する。」と述べられています。強壯作用、精神安定作用、生理機能賦活作用、記憶能改善作用などがあります。

甘草はマメ科カンゾウ、ウラルカンゾウの根および匍匐枝、匍匐茎です。『神農本草経』では上品に収載されており、「五臓六腑の病、寒熱、邪気を主る。筋骨を堅くし、肌肉を長じ力を倍し、金瘡や腫を治し、毒を解す。」とされています。鎮痙作用、鎮咳作用、抗炎症作用、抗アレルギー作用、中枢抑制作用、副腎皮質ホルモン様作用、性ホルモン様作用などがあることが知られています。

麦門冬湯では、以上、6つの生薬が組み合わさって作用を発揮します。その滋陰作用、補気作用によって、胃を潤し補い、肺を潤して大逆上気を収めると考えられます。

## 古医書における記載の紹介

福井楓亭（ふくいふうてい）の『方読弁解』には、「此の方は上気をし、息せわしく、咽

喉喘気ある症を目的とし用ゆべし。老人津液枯槁し食物咽につまる膈症（かくしょう）に似たる者あり。回春当帰養血湯の行く処に此の方を用いるところあり。膈噎門に見たり。又、大病後水を飲むことを嫌ひ咽にせりつきあり竹葉石膏湯を用い難き症に是を用ゆことあり。其の症虚煩なきを持って分かつべし。方中の粳米は即ち竹葉石膏湯に用ゆると同じく津液を潤す為なり。」とあります。

咳嗽の症状のほかに、老人の咽喉の乾燥に伴う膈症、すなわち嚥下困難に用いるとされており、今日の高齢者医療でも応用できる可能性があるかと考えます。

目黒道啄の『餐英館療治雑話』（さんえいかんりょうちぎつわ）には、「此の方は外感の証ならば既に汗下をへて、持病の痰飲喘息の類、既に雑治を経て津液枯燥し虚火疼を挾にて上炎し咽つまりて不利し、ゼリゼリと声あるを標的とす。面赤は尚更よし。麻杏甘石湯、小青竜加石膏湯などの喘と此方或いは蘇子降気湯の行く痰喘と喘の模様相異あり。大抵喘にて虚実の判断ある者なり。（中略）肺痿の主方といへたり。老人、虚人の喘嗽別して此の方、応する証多し（後略）。」と記載があり、麦門冬湯は上気道炎の急性期を過ぎた後の咳嗽や喘鳴に用いるものであるとしています。

顔色が赤いとなおよいとのこと。さらにその症状は麻杏甘石湯、小青竜湯加石膏、蘇子降気湯の適応となるような病態での症状と異なることが述べられています。また、肺痿すなわち肺結核の主方であるという記載や、老人や虚弱者の咳嗽に本処方の適応となるものが多いという記載も注目すべきであると思われます。

和久田叔虎（わくだしゆくこ）は『腹証奇覧翼』の中で麦門冬湯について、「竹葉石膏湯の証に似て、煩渴の証なく、痰気肺部を犯し、咳嗽あれども痰出がたく、咽喉不利しめす。声朗らかならず。或いは聲（声）、唾（つかえ）て出ざるもの。其の腹状は胸満し腹部上に迫り気上衝し小腹力なきもの。麦門冬湯の証なり。」と竹葉石膏湯との違いを述べているほか、声枯れに対する効能を述べています。

腹候に胸満とその上腹部への波及、および下腹部の軟弱無力を挙げている点は注目すべきと考えます。

有持桂里は『校正方輿輓』の中で、「痢疾。其の人、実せずして瀉心湯、鵲石散（しゃくせきさん）など用ひ難き症に此の湯を用て可なり。能く逆を止め、気を下すなり。大逆上気咽喉不利逆を止め気を下すとは此の方の本旨なれど今、直ちに労熱咳嗽の主方と為して可なり（後略）。」と述べ、麦門冬湯が痢疾すなわち一種の発作性精神疾患で実していないため瀉心湯、鵲石散などが用いにくいものに用いるとしています。また、「労熱咳嗽の主方」と慢性消耗疾患による発熱、咳嗽の中心の方剤としています。

尾台榕堂は『類聚方広義』で、「久咳、労嗽にして、喘満し、短気し、咽喉利せず。時に悪心、嘔吐ある者を治す。」としており、悪心や嘔吐という消化器症状に言及している点は注目すべきと思われます。

浅田宗伯は『勿誤薬室方函口訣』で、「この方は肺痿、咳唾、涎沫（えんまつ）止まず、咽燥して渴するものに用ゆるが的治なり。「金匱」に大逆上気と計りありては漫然なれども、

蓋し肺痿にても、頓嗽にても勞嗽にても妊娠咳逆にても、大逆上氣の意味ある処へ用ゆれば大いに効ある故、此の四字簡古にて深旨ありと見ゆ。小兒の久咳には此の方に石膏を加へて妙驗あり。」と述べ、妊娠の咳嗽に用いるとしています。また小兒には石膏を加えて用いると述べており興味深い知見です。